
バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！～

【Zコード】

N3171Z

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

これは、ある幽霊の少女とひとりの少年の物語。バカテスの第二作です。楽しく読んでいって下さい

プロローグ（前書き）

こんには、松竹梅です

バカテスの一作目になりますが、

楽しく読んでいって下さい

プロローグ

いつも…

いつも私はひとりぼっち…

誰にも気づかれることもなく時間が過ぎていく…

春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がきて…

季節が永遠に続いていく…

時々、私に気づいてくれる人もいた…

だけど…

だけど、ある人はそれきり学校に来なくなつた…

噂ではそのまま転校したみたい…

また、ある人は狂ったかのように逃げていった…

噂ではそのまま隔離病院に入ったみたい…

私はひとりぼっち…

わたしは…

いやだ…

いやだいやだ…

いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだI Y A D A イヤだ i y a d a 嫌
だイヤダイヤダイいやだ嫌だI Y A D A イヤダイヤだ嫌だいやだイヤ
だ嫌だいやだ嫌だいやだI Y A D A イヤだ i y a d a 嫌だイヤダイ

ヤダいやだ嫌だIYADAイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいや
だ嫌だいやだIYADAイヤだi yada 嫌だイヤダイヤだいや
嫌だIYADAイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいや
だIYADAイヤだi yada 嫌だイヤダイヤだいやだ嫌だIYADA
DAイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいや
Aイヤだi yada 嫌だイヤダイヤだ嫌だIYADAイヤ
イヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAイヤだi
yada 嫌だイヤダイヤだ嫌だIYADAイヤダイヤだ嫌だ
いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だIYADAイヤだi yada 嫌だ
だイヤダイヤだいやだ嫌だIYADAイヤダイヤだ嫌だいや
だ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAイヤだi yada 嫌だイヤ
ヤダいやだ嫌だIYADAイヤダイヤだ嫌だ！

もつ…

もつ、ひとりはイヤ！

誰か…

誰か気づいて！

私は…

私は此処にいるのに…

「ねえ、キミ、そんなどこに向かっているの?」

『え?』

『わ、私が見えるの?』

「なに言つてゐるよ。此処にはキミしかいないじゃないか

ああ、私の正体を知らないのね…

『私はね、幽霊なんだよ?』

「ははは、冗談はやめてよ

『ほり、これを見て』

「え?」

ほら、私が壁をすり抜けるとこを見せたら固まっちゃった

この後は、いつものよつに逃げていくんだろうな

そして…

そして、私はまた…

また…

ひとつまつりになるのね…

「…………す」

「す、いー」

『え？』

「す、じょー僕、幽靈見るの初めてだよー。」

『お、驚かないの？』

「なにが？」

『私、幽靈だよ？』

「幽靈だからどうしたの？」

『え？』

私はさつきから驚いてばかりである

「そうだー。」

「ねえ、僕とお友達にならない？」

『！？』

今この子はなんて言った？

お友達？

私と？

『お、お友達になってくれるの？』

「うん 僕は吉井 明久あきひさって言いつんだ」

「キリの名前は？」

私？

私の、名前…

『わからない…』

「え？」

『私、自分が誰なのかは分からぬの……』

本当…

私は何者なんだろう…

「ん〜、そうだー僕が名前を付けてあげるよ」

『え？』

「そりだな…………吉井 ゆい 、幽乃 ゆうの、なんてどうかな？」

『吉井 幽乃』

私の名前…

私の…

『ふえつ、』

「え？」

『うええ～～～～～ん！～』

「え！？ なんで泣き出すの！ そんなに氣に入らなかつた？」

『ち、違うの』

「？」

『わ、私、ずっと……ずっと、ひとりぼっちだつたの……』

「……」

『私を見た人は、みんな……みんな逃げていった。

中には仲良くしてくれた人もいたけど……結局はみんな私のことを
忘れていった……』

「…………」

『ひとりじゃないと思うと……私……私、うれしくて……』

ギュウツ

『！？』

「大丈夫……今度から僕がキミの家族になつてあげるから」

『…………家族…………』

「だから、今はおもいかつきり泣いていいよ？」

『…………明久』

「なに？」

『明久……あ、き久……あきひ……う、ふえ、うえええええええええん』

いっしょで、私に新しい家族が出来ました

プロローグ（後書き）

次はいよいよ本編です

～キャラ紹介～

名前：吉井 幽乃

性別：女

種族：幽霊

身長：推定160cm

体重：幽霊だからありません

容姿：幽霊なので肌は青白いが、黒髪をおかっぱ頭にし、瞳の色は黒い

好きなもの（こと）：明久・友達・ぬいぐるみ

嫌いなもの（こと）：明久と友達をいじめ、傷つける人（島田 + FF団）・塩

服装：基本的にセーラー服姿（明久達が調べたところ昔の旧校舎の制服であることが判明）だが

時々どうやっているのか、ナース服や巫女服を着ることがある

備考：明久が一年のときに元旧校舎の屋上で会い、名前を付けてそのまま家族になる

いつもぬいぐるみに憑いており、周囲には最新型のぬいぐるみ型口

ボットと言つて誤魔化している

幽乃の正体に気付いているのは明久、瑞希、翔子、西村教諭、学園長だけである

～キャラ紹介～（後書き）

次からはいよいよ本編です

では、お楽しみに

第一話（前書き）

お詫びの人もいると思いますが、

幽乃のセリフは『』で書いていきます。

第一話

『…………懷かしい夢だな…………』

朝日が射し込むリビングで私は目を覚ました。

『明久を起こさなきや…………』

私は飛びながら明久の寝室に向かった。
なぜ、飛べるかつて？

私、吉井 幽乃は幽霊だからだよ。
ん？幽霊なのに寝るのはおかしい？

余計なお世話だね

『明久～朝だよ～』

寝室の壁をすり抜けて、明久の体を揺すつた。
なんで明久に触れるかといふと、どうやら明久は靈感が強く、触
れることも出来るんだそうだ。
これは学園長から聞いたんだけど……なんでそんなこと知ってるん
だろ？

「ん、幽乃？」

『おはよう明久、もう朝だよ?』

「そうだね、なら、着替えるから出でてくれる?』

『わかつた』

私が部屋の外に出て、少し経つと明久が制服姿で現れた。
そして、朝食をすませると明久は学校へ行く準備をした。

「じゃあ、幽乃？」

『分かったよ』

私は明久が持っているティベアの中に入った。

実は私、学校では最新型のロボットってことになってるんだ。
他にもぬいぐるみがあるけど、一番のお気に入りは白猫のぬいぐる
みかな？

だって、明久からの最初のプレゼントだもん

「それじゃあ行こうか？」

『うん』

こうして、私たちは学校に向かった。

「おはようございます。鉄じ……西村先生」

『おはようございます。西村先生』

「おはよう吉井兄妹。それと吉井兄、今、鉄人と言わなかつたか？」

「ははつ、気のせいですよ」

「ん？ そうか」

この肌が黒く筋骨隆々の人は、補習担当の西村 宗一先生だ。私が気に入っている先生の1人なんだ。

だって、私の正体を知つても逃げたりしないで変わらずに接してくれるんだから。

ちなみに鉄人っていうのは、西村先生のあだ名でトライアスロンが趣味つてところからついたみたい。

あと、なんで兄妹かというと、周りからは最近できたロボット+女の子=妹っていう式が出来ているみたい。

「ほら、クラス分けのだ」

そう言つと西村先生は明久に封筒を渡した。

「何処なのか分かつていますけどね」

「しかし、一年の後半から成績が上がり始めて、一年の終わりにはAクラスも取れるところにまできていたのに残念だったな」

『氣にしないで下さい。あれは、明久が決めたことなんですから』

「どうか、まあ、頑張るように」

「『はい』」

私と明久は返事をして教室に向かった。

向かっている最中に明久は封筒を開いて中の紙を取り出して見た。

吉井 明久 Fクラス

今年も楽しくなりそ�だな

第一話

「ねえ、時間まだあるから、Aクラスでも見てこい。つい

『うん、いいよ』

HRが始まる前に私と明久はAクラスに向かった。

「す、いね……」

Aクラスを見た明久の言葉に私は頷いた。
まあ、私は何度も見てるけどね。

でも、流石にこれはやりすぎじゃないかな?
何処かの高級ホテルを思わせる装飾ばかりだよ。
あ、Aクラスに入った子が気絶しちゃった。

「AクラスがこれだとFクラスはどんなんだろうね」

『や、わあ……』

言えない……Fクラスの教室は知ってるけど言えない！

「うん、帰りや」

『明久！帰っちゃダメだよ』

「いやだ！」んなオンボロ小屋が教室なわけがない…はつ…そうか、これは夢だ。夢なんだ！」

『明久！現実逃避しないで…』

「……なに漫才やつてるんだ？」

『あ、雄一くん!』

話しかけてきたのは、明久の親友（明久は悪友って言つてたな）の坂本 雄一くんです。

「雄一、おはよう」

「それでどうしたんだ？」

『あまりの教室のひどさに明久が現実逃避してたんだよ…』

「確かにひどいな……」

「雄一くんも苦笑してたよ。

今度、カヲルさんに言つてみよ。
カヲルさん、学園長だからね。

「皆さん、おはようございます。」のクラスの担任になる、福原慎です。」

時間は経ち、HRが始まりました。

「それでは廊下側の人からは自己紹介をして下さい」

「木下 秀吉じや。演劇部に入つてある」

あ、秀吉くん。

とても、綺麗な顔立ちです
女の子みたいですね。
え？女の子じゃないのかって？
だって……

「言つておぐが、ワシは男じやー」

そう男の子なんですよね。

「…………土屋 康太」

つぎは康太くんです。

割と去年のクラスメイトがたくさんいますね。

「……です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あつ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は……」

あれ？女の子もいたんですね。
誰なんで、

「吉井明久を殴ることです」「

……要注意です。

明久の友達の中で要注意人物の島田 美波さんです。
明久に暴力を振るうこと数々、何度も驚かして（幽霊的な意味で）
やりましたが、
まだ懲りてないみたいですね……
ほら、明久が震え出しました。

「え？」

明久の番ですね

「吉井 明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでください」

ち、ちょっと／＼／

いきなりなにを言い出すの！？／＼／

『『ダア——リイ——ン——』』

……気持ち悪いです。

明久も気持ち悪いのか顔色が青くなっていますね。

よし、いじむ

『次は私だよ』

私が空氣をかえよう！

『ロボットの吉井 幽乃です。学生じゃありませんが仲良くなれて下さい。気軽に『コノちゃん』って呼んでね』

『『コノちゃん…』』

『はーい』

『『かあ～わい～～い！』』

わつわよつは空氣が和みましたね。

「ありがとう幽乃」

『大丈夫だよ。だ、ダーリン／＼／＼』

わや、言ひやつた

ガラッ！

「す、すみ、ません。遅れ、てしま、いました」

『『『『え？』』』』』

いきなり教室に女の子が入ってきました。
あれって……

『瑞希?』

そこには私の親友、姫路 瑞希さんがいました。

第三話

なんで瑞希がいるんでしょうか？

Aクラスほどの実力があるのに？

あ、確かに体調を崩して途中退席したんです。

明久もその付き添いで途中退席になり、無得点扱いでFクラスになつたんでしたね。

私はその事を歸つてきた明久から聞きました。

「」「今年一年よつよ……よろしくお願ひします／＼／＼

噛みましたね…

真っ赤になりながら瑞希が「」に来ました。

「緊張しました」

「瑞希ちやん」

「姫」

『み～ずき～』

?一人も瑞希に話しかけようとしたよつな、気のせいですね

「え? 幽乃ちやん?」

「おめよひ、瑞希ちやん」

「あ、明久くん!／＼／＼

あらあら今頃、気付いたんだ。

「明久がブサイクですみんな」

「そ、そんな…えつーと…」

「代表の坂本 雄一だ」

「あ、よろしくお願ひし……それより…明久くんはブサイクじゃありません! 田もパツチリして顔のラインも細くて綺麗だし……そのむしろ……」

そうそう明久は顔は整ってる方だよね。

それより瑞希? 今近くに明久がいること忘れてない?

「まあ、悪くはないな。……そういう興味がある奴もいたな」

「え? 誰?」

「そ、それって誰ですか! -」

瑞希がす「慌てよづだよ。

「確か… 久保…」

久保さんですか?

でも、この学年にいる久保つて…

「……利光だつたかな」

……新情報です。

これは警戒しないといけませんね……

今、言われたことに明久がショックを受けていますよ。

バンバン

「はいはい、そこの人たち静かに」

バキッ！

ガラガラー！

「　「　「　.....　」　」

…………ひどいです。

先生も軽く叩いたんでしょう。

いきなりのことにみんな固まってしまいました。

「え～替えを用意してきますので、自習をしてください」

先生が教室を出て行つてしましました。

「雄一、ちょっといい？」

「あ～どうした？」

「此処じやなんだから廊下で」

明久と雄二くんもこいつそりと廊下に行ってしまいました。

「えー坂本君、クラス代表の君が最後です。前に出てきてください」

あの後も田口紹介は続いていき、雄二くんで最後です。

「了解

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ

「さて、皆に一つ聞きたい

そう言つと雄二くんは教室に視線を移していきます。
みんなの視線も自然とそれを追っていますね。

すき間風が通る教室。

古く、うす汚れた座布団。

汚れて脚もガタガタな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が
・
・
・
「

「……不満はないか？」

『大有りじやあツ！――！』

魂からの叫びですね。

「どうう？俺だつてこの現状に不満を抱いている」

『いくら学費が安いからってこの設備はんまりだ!』

『Aクラスだつて同じ学費だろ！？』

『改善を要求する！！』

「そこで代表としての提案だが、EクラスはAクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う！」

こんな早い試験召喚戦争は私が観てきた中では初めてですね。

第三話（後書き）

次回は勝てる要素を発表します。

明久の成績が！？

第四話

『そんなの勝てるわけがない』

『これ以上、設備が落ちたらどうするんだ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

みんなから反対の声があがつてゐるけど、最後の関係ないよね？

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まつてゐる』

『何を根拠にそんなことを…』

「根拠ならあるわ。このクラスには勝つことのできる要素が揃つて
いる」

雄一くんが自信有りげにそう答えました

「それを今から証明してやるー。」

「おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ。ちょっと
前に来い」

「…………」

康太くんは素早く立ち上がり、首を横に振っています。

けど、頬に畳の跡が残っていますよ？

「はわつ／＼／＼

瑞希は素早くスカートを押さえましたが、遅いですよ。

「土屋康太 ニイツがある有名な寡黙なる性職者だ！」
△リード

そうこうと康太くんはさつきよりも早く首を横に振ります。

『馬鹿な…………奴がそうだといふのかー…？』

『だが見ろーまだ証拠を隠そうとしているぞ』

『ああ、あれ』そムツツリーの名に恥じない姿だ』

確かに康太くんにはムツツリーーーなんて二つの名がありましたね。
瑞希が首を傾げています。

純粋なんです。

そのまままでいてくださいね。

「それに姫路の事は皆もその実力をよく知っているはずだ」

「え？ 私ですか？」

「そうなのです。

瑞希は学年トップ一〇にはいるほどの実力があるのです。

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『さうだ！俺達には姫路さんがないー。』

『彼女ならAクラスにも引けをとらないぞー。』

「それに木下秀吉だつている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープ』

『確かにAクラスに姉が……』

「そのほかにも島田もいる」

「えつ、ウチ？」

「島田は数学だけならAクラスにも匹敵するだけの実力がある

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本つて小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞー。』

『これはいけるんじゃないのか！？』

す”いです！”

今、教室の士気が高まっていますよー。

「それに吉井 明久だつている

明久も出ましたよ！

これなら士氣が最高潮に達しますよ！

シーン

あれ？

『誰だ、吉井 明久って？』

『あれだろ？人形、持ち歩いてる可哀想な変態』

『あいつか…』

「ちょっと、可哀想な変態ってなに…？それに雄二…なんでもそこまで僕の名前を出すのを…そつきまでの士氣を返して！」

「やつか、お前たちは知らないんだな」

「！」この肩書きは『観察処分者』だ…！

「雄二くんはやつにさしきつたけど、それは……

『観察処分者つて馬鹿の代名詞じゃなかつたか？』

「うん、違つよ…ちょっとお茶目な16歳の愛称なんだよ…」

「うん、違つよ…ちょっとお茶目な16歳の愛称なんだよ…」

明久は慌てて否定しますが、

「そうだ、馬鹿の代名詞だ！」

「肯定するなバカ雄二ー！」

「あのそれってどういうものなんですか？」

瑞希が雄二くんに尋ねました。

「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。主に力仕事とかの雑用を物に触れるようになつた召喚獣でこなすんだ」

「それって凄いですね！」

瑞希が田をキラキラさせながら明久を見る

「だが、デメリットもある。

召喚獣が受けた痛みや負担の何割かはフイードバックされて本人にもくる」

『……それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事になるじゃないか？』

「そうだが、気にするなー明久はいてもいなくとも大して変わらん
雑魚だ」

雑魚と言い切りましたね雄二くん。

『明久は雑魚じゃないもん！』

「ゆ、幽乃？」

私がいきなり喋ったことに明久は驚いてしまいましたが、気にしません。

『明久はこのなかで瑞希の次に頭が良いんだぞ！』

「はあ？ おいおい吉井妹、バカな明久が姫路の次に頭が良いわけないだろ？」

「あの坂本くん？ 本当に明久くんは頭が良いですよ？」

「へ？ どういうことだ姫路？」

「だって、私と翔子ちゃんが手取り足取り教えたんですから」

あ、瑞希、それは……

『総員狙え！』

いきなり皆さんカッターを構えましたよ！

「ええ！ なんでカッターを構えてるのー！」

『黙れ！異端者が！血祭りにあげてやる…』

『女子一人と楽しく勉強会だと…』

『しかも、手取り足取り腰取り教えてもらつただと…』

『…………許せん…』

『『『『『覚悟しろ…』』』』』

大変です！

皆さん怒っています！

といいますか、なかに不穏なものもあつましたが…

「眞さん落ち着いてください…」

「やうじやぞ…」

瑞希と秀吉くんが明久の前に立ちました。

『ちくしょう！女子一人に守られやがつて…』

『くそ、今回だけは勘弁してやる…』

『ワシは男じやぞ…』

秀吉くんも苦労しますね…

「まあ、いろいろあつたが…、とにかくだ！俺達の力の証明として、必ずロクラスを制圧しようつと思つ

雄二くんが仕切り直してますね。

「みんな、この境遇に大いに不満だろ？？」

『『『当然だ！』』』

「なら全員、筆^{ペン}をとれ！出陣の準備だ！」

『『『おお～～～～！』』』』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『『『『打倒Aクラス！』』』』』

「ついて、第一次試験召喚戦争が始まりました。」

第五話（前書き）

ロクラス戦前の作戦会議を省きます。

いよいよロクラス戦です！

ノッポガキさん、感想ありがとうございますー！

第五話

『「つむお～～～～！」』

只今、Dクラス戦が始まっています。
あのあと、雄一くんが明久に宣戦布告に行かせよつとしましたが、
私と瑞希の説得により須川くんが逝きました。
実際には私と瑞希が宣戦布告に行くと言いました。え？脅迫？違いますよ

そのあと午後になり戦争は始まりました。

「……そろそろだな」

?なにがでしようか?

ちなみに私は教室にいます。

明久と瑞希は回復試験に行つてしましました。

私つて、生徒じゃないので召喚獣出せないんです。

そもそも幽霊の私が召喚、出来るんでしょうか？

『雄一くん、そろそろつてなに？』

「島田の部隊が臆病風に吹かれて後退し始めてるはずだ

読み上げてくれー」

『えー…どうするの？』

「いわするわ…………おーい！誰かこのメモを島田の部隊まで行って、

そう雄一くんが言つとひとりの生徒がそれを持って、教室から出て

行きました。

『雄一くん、なにを書いたんですか?』

「まあ、大人しく聞いてみるよ」

雄一くんがそう言いましたので、聞き耳を立てていますと…

『そ、総員突撃よー』

島田さんの叫び声が聞こえました。

一体、なにが書いてあつたんでしょう? つか?

『坂本ー.』

「ん? ビーフしたんだ?」

『島田からの伝言で先生方に偽情報を流して欲しいやつだー.』

「…………〇クラスはどの先生を呼んでるんだ?」

『確かに……船越先生だったはずだが?』

「そうか…」

雄一くん?

嫌な笑みを浮かべてますよ?

「よし、明久が体育館裏で待ってると校内放送で伝えてくれ

な、なんですって！」

「ふ、船越先生といえば…

婚期を逃してしまい、単位を盾にして生徒にまで手を出したりする
恐ろしい先生ですよね…

『雄一くん、そんなことしないよね?』

「これは作戦に必要なことなんだ」

『雄一くん』

「いや、だからな…」

『……（・）（・）』

「…………予定変更だ。明久ではなく偽名を使ってくれ。あの先生なら偽名と知つても行くはずだ」

『ああ、分かった!』

そうして、その生徒は放送室に向かつて行きました。
雄一くん、ありがとうございます!』

ピンポンパンボーン！

『連絡いたします。船越先生、船越先生。Fクラスの文月左門くんが体育館裏で待っています。生徒と先生の垣根を越えた話がしたいそうです』

放送の後、戦場の方からにわかに騒ぎ出しました。

『ちよっとー船越先生、何処に行くんですかー！』

『今は戦争中ですよー！』

『あれば明らかに偽名ですよー！』

『ええい！放しなさい！若いあなた達には分からぬのよーー！待つてなさい左門くん！ーーー』

『あー船越先生ーーー！』

……本当に明久じやなくて良かつたです……

そのあと雄一くん達の本隊も向かい、しばらく経った頃……

『戦争終了！ 勝者、Fクラス！』

とこつ声が響きました。

でも、私ひとり教室に残されて寂しいです……

第六話

『あつきひわ』 』

「わっ！？と、どうしたの幽乃？」

Dクラス戦の戦後対談を終えた明久達が帰ってきたので、私は明久に飛びつきました

『ひどいよ明久、私だけ置いていくなんて～～』

「あはは、『めんね。でも、次の戦争の時も教室で待つてね』

『そんなん～』

「帰つたら、いっぱい遊んであげるからね」

『ぶ～～、分かった…』

ひとりで待つてるのは寂しいけど…
明久が遊んでくれるなんらいいか

『それじゃあ、帰ろ～～』

「うん、そうだね」

「あー。」

『『どうしたの？』』

正面玄関まで来ると明久が驚いた声をあげました。
『どうしたんでしょう？』

「教室に筆記用具を忘れたみたい」

『も～しようがないな明久わ』

再び私達は教室に入りましたが、

『あれ？ 瑞希？』

なんと瑞希が残っていました。

「あ、あ、明久くんこむ、幽乃ちゃん。ど、ど、ど、どうしたんで
すか？」

……何か知りませんが、すゞこ慌てよつです。
おや？卓袱台の上に何かありますね。
あれは、手紙でしようか？

『どうしたの瑞希ちゃん、そんなに慌てて？』

「な、なんにもあります…」

ドタッ

「あ」

瑞希が慌てて立ち上がり、卓袱台にぶつかり転んでしました。

大丈夫でしょうか？

「ん？ なにこれ？」

明久の足元に瑞希の手紙？ がきましたね。
なんて書いてあるんでしょう？

『あなたが好きです』

.....

《明久》

「?.なし、幽乃」

《その手紙、私に貸して?》

「いいよ、はー」

《ありがと。あと、瑞希と話があるから正面玄関で待っててくれ
る?》

「わかったよ」

《ちなみに……》

「？」

《手紙の内容つて見ましたか?》

「…………見てないよ」

嘘ですね。

明らかに田が泳いでいますよ?
あ、出て行つてしましました。
それで…

《瑞希》

「ゆ、幽乃ちゃん」

《はい、これ》

私は手紙を渡しました。

「…………幽乃ちゃん」

《?なし》

「明久くんはこの手紙を見ちゃいましたか?」

《…………たぶん、見たと思つよ》

「…」

瑞希は驚いた後、目に涙が溜まり始めました。

「…」んな形で見られたくありませんでした……」

『瑞希……どうせ明久のことだから、瑞希が他の人に宛てた手紙だ
と思つてるよ…』

「…………そうですね。明久くんですもんね…」

一人そろつて溜息が出てしました。

『瑞希、去年に私が言つたこと覚えてる?』

『私は瑞希の恋を応援するつて』

『私達は親友なんだからつて』

「覚えていますよ」

瑞希がさつきまでの泣き顔からきれいな笑顔に戻りました。

『明久は鈍感だけど、頑張るうね』

「はい」

私と瑞希は握手をして笑っていました。

『おまたせ～』

あのあと、瑞希と別れて急いで明久の元に向かいました。

「瑞希ちゃん、なにを話してたの？」

『女の子同士の秘密の会話だよ それより明久、早く帰ろ!』

「分かったよ」

私たちは仲良く帰宅しました。

第七話（前書き）

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

いよいよ姫路の弁当が明らかに！

キーンパーンカーンパーン

四時間目終了のチャイムが鳴りました。

鳴ったと同時にほとんどの人が卓袱台に突っ伏していました。
今田は昨日の戦争の回復試験をしていました。

生徒じゃない私は結構、暇でしたね…

「よし、昼飯を食いに行くぞ！ 今日はラーメンとカツ丼と炒飯と力
レーにすつかな」

雄一くん、流石に食い過ぎじゃない？

「あの、皆さん」

「ん？ どうしたんじや、姫路よ？」

「お弁当を作つてあたんですけど一緒に食べませんか？」

「え？ いいのウチ達まで？」

「はい、ちよつと多く作りすぎてしまつて」

そうこうして瑞希はお弁当を取り出したんだけど……
なんで重箱？

「せつかくの『』馳走じやし、教室ではなく屋上にでも行くのか？」

「そうだな、だったらお前ら先に行つてくれ」

『雄一くん、用事でもあるの?』

「違う違う、飲み物を買ってくるだけだ」

「なら、ウチも行くわ。一人じゃ持ちきれないでしょ?」

そういうて二人は教室をあとにしました。

「それじゃあ行こう。瑞希ちゃん、お弁当は僕が持つよ」

「ありがとうございます。明久くん」

うんうん、仲が良いね
その後、明久達と屋上に行つて、しばらくして雄一くん達も来ました。

「はい、食べてみてください」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

みんな驚きの声をあげました。

当然ですね。

なんたつで、そこには色とりどりのおかずがあって、ご飯なんかパエリアなんだから。

「おれはここがいいんだ」

「すいこわね、瑞希」

「………… 美味そつ

「よくこれだけの量を作ったな」

「はい、朝の四時半から作りましたから」

「早過ぎるじゃないー?」

流石に早く起きあがだよ、瑞希…

「(J)たなに美味しくなるなんて霧島さんに感謝だね」

「?なんでそこで翔子の名前が出るんだ?」

「瑞希ちゃん、今まで料理に薬品を平氣で混ぜる人だつたんだよ?」

ビキッ

あつ、みんな固まりましたね。

あつ、今度は箸を置いて下がり始めました。

「た、食べても大丈夫なんだろうな?」

「なに言つてゐるのを雄一。今、食べたばかりじゃない」

「でもよ…」

《それに言つたじやん、翔子のおかげだつて》

『去年、明久は翔子が瑞希に一から料理を教えたんだよ』

「え？ 吉井も料理出来るの？」

「明久は一人暮らしだからな。今はロボットがいるが、家事全般はこなせるぞ」

「けど、あの時は大変だったな……」

『せうだね……いくら注意しても目を離した隙にすぐに薬品を入れようとするんだもん。止める方は気が気じやなかつたよ……』

「去年あいつが時々、疲れた顔をしてた意味がようやく分かつたよ……」

「ううんだよね……」

味見を瑞希がしないのもあって、翔子が倒れたときは本当に焦ったよ……

「といひで雄一よ」

「なんだ秀吉？」

「霧島とは仲がいいのかの？」

「ああ、あいつとは幼なじみだ」

まざいです。

ヒュッ！

ダスツ！

「……………」

血涙を流しながら言わないでよ、康太くん……

「落ち着いてムツツリーーー！」

「アーヴィング、おまえが何者だ？」

明久と瑞希が康太くんに抱きつきました。

「」

「しっかりしてください！土屋くん！」

「か、感無量」
バタツ

「ムツシニー！……（啜泣）」

「土屋くん！――（号泣）」

「…………なんだねの」「ノホトせへ。」

『さあ、私にも分かりません……』

とりあえず、遡きかけた康太くんを戻して作戦会議をしてお昼は終わりました。

第七話（後書き）

次回からはBクラス戦です。

第八話（前書き）

怪現象がおきます。

「注意ください。」

第八話

いよいよBクラス戦が始まりました。

私は毎度の事ながら教室でお留守番です……

お昼休みの時、また明久を宣戦布告の使者にしようとした雄二くん。私達の説得（前回みたいなことしました）により、今度は横溝くんが逝つてくれました。

え？ 前回も今回も漢字が違う？

気に入ら負けですよ

『失礼する。Fクラスの代表はいるか？』

いきなり誰か入つて来ましたよ？

「代表は俺がなんだ？」

『Fクラスと停戦協定を結びたいから一緒に着いてきてくれ

「…………待ち伏せじゃないよな？」

「大丈夫だ。だから、こうして先生を証人として連れてきた。」

「…………分かつた。着いていこう、他のヤツも来てくれ」

雄二くんは教室にいた人達と行つてしましました。

あれ？ また、置いてかれた？

寂しいな、○ゝゞ

仕方ありません。大人しく待つことにしますか。

ガラツ

？随分、早いですね。

もう、終わつたんでしようつか？

『おい、大丈夫なんだろうな？』

『あいつの作戦だ。大丈夫じゃないか？』

『まあ、失敗しても。あいつの所為にすればいいだろ？』

『そうだな』

誰なんでしょうが？

Fクラスの生徒じゃありませんね

『とにかく、ひとつひとつかねー！』

そういうとその人は手近にあつた卓袱台を壊しましたつて…

『いきなり、なににするのー？』

『おわー！なんだこれ？』

『氣にせすすりやひやひやひー！』

そりて卓袱台や勉強道具を壊してこきます。

『やめてー。』

『これ結構楽しいなー!』

『やめ…』

『ああ、やめれねえなー!』

『……』

『ハハハツ！…』

『止めてって言つてるでしょ!!』

『…』

……もつ許さないんだから

（NO side）

最初に男子生徒達が気付いたのは温度だった。

春先とはいえ、連日晴れ間が続いたため比較的に暖かい温度であった。

当然、Fクラスですきま風が吹くとはいえ、さつきまでは暖かい温度だった。

「う、さつきまでは…

『おい、なんか寒くないか?』

『ああ、確かに』

『みる、息まで白いぞ』

だんだんと温度が下がり、男子生徒達は震え始めた。

カタカタツ

『……………?』

ガタガタッ！

『……………?』

音が鳴り始め、男子生徒達は振り返り、驚愕の顔をした。

そこには…

今まで自分達が壊した卓袱台や教科書、筆記用具などが浮かんでいた。

《……………?》

ふと声が聞こえた。

慌てて声がした方を向くと…

さっきまでいたウサギのぬいぐるみが浮きながら男子生徒達を睨みつけた。

『な、なんなんだよアレ！』

『知るわけないだろ！』

『私は壊さないでって言つたよね？』

『氣にするな！こんなのただの見せかけ』

ヒュッ

ドスツダスツ！

『ひつ…』

男子生徒達のひとりが落ち着かせようとしたが、

その足下に卓袱台の木片やペンなどが突き刺さつた。

『私は言つたよね？やめてつて？』

『『『』（「ク」）』』』

男子生徒達は震えながら、壊れた人形のように首を縦に振り続けた。

『もし、今度やつたら…』

『『『』（ガタガタッ）』』』

『殺すよ？』

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

バタバタッ

そのまま男子生徒は氣絶してしまつた。

のちに男子生徒達は語る…

Fクラスには幽霊がいると…

「No side out」

「む、これはひどいの…」

『あ、明久に秀吉くんお帰り』

「幽乃だけかの？雄一たちはどうしたのじや？」

「この人達は？」

『雄一くんは停戦協定を結びにいったよ、この人達は犯人さん』

「Bクラスの生徒かの」

「やつぱり、根本くんの命令だよね」

『根本くんって、あの毒キノコ?』

「やべ、あのキノコ頭の根本くん

あの毒キノコですか?

カンニングは常習犯、喧嘩の時には常にナイフを常備と舉げたが、元がわしい奴ですね。

『この人達どうじようか?』

「とりあえず、鉄人を呼ぼうか

ボクッ

「あいた!」

「西村先生と呼ばんか!」

『あれ? 西村先生、どうして此處に?』

「ワシが呼んできたのじゃ

秀吉くんが呼んできたんですね。
いつの間に行つたんでしょう?

「それで、これはどうしたことだ?」

『それはですね』

私は今までの事を話しました。

能力を使つたことは秘密にして、氣絶したのは私が声を掛けたところ、たまたま、足下にあつた教科書で全員、転んでしまつたことにしました。

「やうか、分かつた。たゞふりと事情を聞く」とにしよう

そのまま西村先生は男子生徒を連れてつてしまひました。

「幽乃」

『なに、明久?』

どうしたんでしょう?か?

「恐かつたんでしよう?」

『-』

……恐かつた。

確かに恐かつたよ。

人形を切られたり踏まれたりしても痛くはないけど

ひとりは……

ひとりは恐かつたよ

「ほら」

明久が腕を広げています。

『明久!』

私は明久の胸に飛びつきました。
しばらくは明久の胸のなかにいました。

第八話（後書き）

これが世にいうポルターガイストか！
よく、分かりませんが

第九話（前書き）

みなさん、感想ありがとうございます！

第九話

「なに、Cクラスの動きが怪しい？」

今は停戦中です。

あのあと、島田さんが人質に捕られたり（自業自得ですけどね…）といろいろありましたが、また、トラブルでしょうか？

「大方、漁夫の利を狙つておるのじやうつ」

「ところで、Cクラスの代表って誰なの？」

「…………こいつだ」

康太くんが一枚の写真を渡しました。
と言いますが、なぜ持つてるの？

『明久、見して見して』

「はい」

『ありがと』

さて、どんな子なんだろうな。
あれ？この子って…

「しようがない、Cクラスにふか『ねえ、雄一くん』？どうしたんだ、幽乃？』

『あのね確証はもてないけど、この子、確か毒キノコの彼女だよ?』

「　　なに……」「

皆さん驚いてますね。

「そりが隈をな……面白いからのつてみるか」

「え、行くの?」

「恐らく根本は教室の何処かに隠れている。それでこっちがCクラスと交渉したのを協定違反だとかいつて襲いに来るはずだ。そこを逆手に取る」

「それじゃあ、Cクラスも敵になるつて」と。

「そうなるな。まあ、そつちは考へていて。今はCクラスに行くから残っているヤツは来てくれ」

そういうて、他の人達と一緒に行つてしまひました。
あれ?また一人だ?○△

「今から作戦を実行するー！」

翌日です。

昨日のあの後、雄二くんが得意の話術？でBクラスの人達を何人か補習室送りにしたそうです。

ご愁傷様。

「でも、まだ始まつていないよ？」

そうですね。

「BクラスじゃないCクラスの方だ」

「あ、そっちは。それで何するの？」

「秀吉ヒコレを来てもらひうつ」

そう言つて、雄二くんはそばにあつた紙袋から女子の制服を取り出しましたけど…

『ゆ、雄二くん／＼そんな趣味があつたの？／＼／＼』

「待て幽乃、お前は何か勘違いしているー！」

「そうだよ幽乃、あれは雄二の性癖だよ」

「それも違つからなーーー！」

あ、違うんですね。

「それは別に構わんが、ワシが女装してビリあるんぢや？」

抵抗しましょひよ。秀吉くん…

「秀吉には木下優子として、アクラスの使者を装つてしゃう。と言
う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ。分かったのじや」

雄一くんから制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉くんです
が、
女子がいる」と忘れていませんか？

「よし、着替え終わつたぞい。ん？ 鮎ひうしたのじや？」

「わあな？ 行くぞ」

こいつて、明久と雄一くんと秀吉くんは行つてしましました。私？
私は毎度の事ながら留守番ですよ。

《?》

なんか瑞希の様子がおかしいですね？
何か嫌な予感がします…

「ただいま

数分後、明久達が帰つてきました。

『どうだつた?』

「なんといつか……」

その時の様子を聞いた私は、すぐに秀吉くんの所に行きました。

『ねえ、秀吉くん?』

「どうしたのじゃ幽乃?」

『優子ちゃんに知られたら、怒られるんじゃないの?』

あ、しまったという顔をしていますね。
だんだん顔が青くなつてきました。

「幽乃、短い間じゃつたが楽しかつたぞい」

『…………秀吉くん、謝るときは私も一緒にいるからね…………』

「かたじけないのじゃ……」

一人そろつてため息をつきました。

第十話

「雄一っ！」

Bクラス戦が再開されてから、しばらくすると明久が戻ってきました。
どうしたんでしょう？

「うん？ どうした明久？ 脱走か？ チョキでシバくぞ」

「話があるんだ」

「……とつあえず、聞こつか」

いつになく真剣な顔ですね。
なにか重大なことでしようか。

「根本くんの着ている制服が欲しいんだ！」

.....

「……お前に何があつたんだ？」

「もつとも。

「ち、違うんだよ！ これにはいろいろあつて……」

「それだけか？」

「あと、瑞希ちゃんを戦闘から外してほしいんだ

え？ 瑞希を？

やつぱり、なにかあるんですね…

「理由はなんだ？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「どうしても

「……」

「頼む、雄一ー。」

《あ、明久？》

明久がいきなり下座しました！

「……分かった。ただし条件がある」

「条件？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。科目は何でもいい

「笛のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入口は今のおままだ

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

「これは難題ですね…

「それじゃあ、つまくやれよ」

『え？ 雄一くん、どこか行くの？』

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな

「明久」

「雄一くんは教室から出ようとしたり、振り向かずに話しかけてきました。

「お前にはお前の秀でている部分がある。だから、俺はお前を信頼している」

「雄一……」

「まあ、じつかりやれよ」

そのまま、雄一くんは教室から出て行きました。

（明久 side ）

《明久…》

雄一が教室から出て行つた後、幽乃が話しかけてきた。

「どうしたの幽乃？」

《瑞希になにかあつたの？》

多分、僕の顔は苦虫を噛んだよつになつてゐるんだろう。

「実はね……」

僕は瑞希ちゃんの手紙を根本が持つてゐること、それをネタに脅していることを話した。

パチンッ！パチンッ！

「ゆ、幽乃？」

突然の音に僕は驚いた。
これって、よく幽靈がやるラップ音だよね？

『フフフフフフ』

「恐いよ！」

人形の後ろから黒いのが見えるよ！

『……明久』

「は、はい」

『私にも手伝わして……』

「え？」

『だつて……だつて、私は瑞希の親友だもん！――私の大切な……大切なもの！』

「幽乃……」

『お願い、明久……』

「分かつたよ。一緒に行こう！」

「うん！」

こうして僕は幽乃と戦場に向かった。

（明久 side out）

第十話（後書き）

次回、Bクラス戦、決着！

第十一話（前書き）

Bクラス戦 決着です

第十一話

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないな』

隣から毒キノコの声が聞こえます。

『明久、そろそろ』

「うふー。」

ドンッ！ドンッ！

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

『はあ？ギブアップするのはそつちだろ？』

ドンッ！ドンッ！

『無用な心配だな』

『わづか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

…………この毒キノコが……

ドンッ！ドンッ！

『お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくれ』

『けつ！口だけは達者だな。負け組代表をなんよ』

『負け組？それが「クラスの」となら、もひすぐお前が負け組代表だな』

ドンッ！ドンッ！

『せつから壁がつるせえな。何かやつてこらののか？』

『ああ。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

ドンッ！ドンッ！

『けつ。まつてく。びつせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せー。』

『……態勢を立て直す！いつたん下がるぞ！』

『どひした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

ドンッ！ドンッ！

『あとは任せたぞ、明久！』

午後三時ジャストです。

『いっけー、明久！』

「だあーーーっしゃーーーー！」

ドガニッ！ガラガラ

「くたばれ、根本恭一ーーー！」

明久と他の遊撃隊の人達がBクラスにのりこみました。

「んなー！」

「いくぞ！Fクラス、吉井が…」

「Bクラスの山本が受けます！試験召喚！」サモン

「近衛部隊か！」

「なめやがって！」

毒キノコが手紙を！

《明久！私を毒キノコに投げてーーー》

「え？でも」

《はやくーーー》

「分かつた！いくよー！」

《幽乃、いつきまーすーーー》

「それ、パクリだから、ねー！」

明久が召喚獣で思いつきつくり投げてくれました。

パシッ！（手紙を掴む音）

「あ、この野郎！」

《せやー！》

私は手紙を持ったまま床に叩きつけられました。

「邪魔しやがって！」

《ーー》

毒キノコが足を振り上げました。
踏まれる！

ダンツー！ダンツー！

ビュンツー！

ギュツ

《え？》

「なにー！」

私は毒キノコの足下にいたはずですが、
いつの間にか抱き上げられていました。
私は抱き上げてくれた人を見ました。

それは
…

康太くん

私の友達でした。

「…………Fクラス土屋康太が」

「き、貴様は……！」

「Bクラス根本恭二に保健体育で勝負を申し込む」

「ムツツヨイーーー」
「...」

「試獣召喚」サモン

『Fクラス』
土屋康太

V
S

Bクラス 根本恭一

保健体育

441點 vs 203點

康太くんが一刀のもとに毒キノコを両断してBクラス戦は終了しました。

第十一話（後書き）

毒キノコ（笑）には恐怖体験をしてもらいます。

第十一話（前書き）

恐怖体験をうまく書けたか不安です..

第十一話

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といふか。な、負け組代表？」

「…………」

「さつきまでの威勢がありませんね、この毒キノコ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

え？ どうして雄一くん。

他の人も不満気味ですよ。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここが『ゴールじゃない』

「うん。確かに」

「だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうつかと思つ

「……条件はなんだ」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田

障りだつたんだよな

確かにそうですね。

周りの人達もフォローをするビーチーか、納得してゐる感じがします。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試合戦争の準備ができると宣言して来い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか?」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て行つた通りに行動してくれたら見逃そう」

「雄一くんは、わざと秀吉くんが着ていた女子の制服を取り出しました。

『やつぱりそういう趣味が…』

「違うわー！」

「ちうだよ。あれは…」

「違つひつて言つてゐるだろー！」

まあ、人それですしね…

「ば、馬鹿な」とを言つた。「の俺がそんなふざけたことを…。」

『Bクラス生徒全員で必ず実行せよ!』

『任せて!必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

慌てふためく毒キノコをよそに、Bクラスの人達が賛同してくれました。

「んじゃ、決定だな」

「ぐつーよ、寄るな!変態(ドガツー)ぐふうつー」

『とうあえす黙らせました』

「お、おひ。ありがと!」

見限りましたね。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解!」

《明久》

「なに?」

《私、さきに教室に行ってるね》

「うん、わかったよ」

『それと毒キノコの制服、脱がせ終わったら私に貸して』

「いじけど、どうするの?」

フツフツフツ

『ちょっと恐怖体験を味わつてもらひるために旧校舎の理科準備室に置いとくだけだよ』

「理科準備室って……人吉さんとお骨さん?」

『うん、おじいちゃんとおばあちゃんで手伝つてもううの』

トライアゴマを植え付けてあげますよ。

「分かったよ。けど、それじゃあ生ぬるいから制服は理科準備室にあるつてことにして、制服自体は捨てようか」

『それもいいね』

私達は笑いながらしゃべつてました。

そんな様子に周りが引いていたのは気にしません!

『みーずき』

「幽乃ちやん？」

私が教室に戻ると瑞希は「むかしを回りました。
田元が赤いですね…あつと、泣いてたんですよ。

《はい、これ》

「…」

私が手紙を差し出すと瑞希は驚きながら受け取りました。

「幽乃ちやん、じめんなさい」

《じつして謝るの?》

「私が手紙を盗られたばかりに幽乃ちやんやみんなに迷惑をかけて
しまつて…」

《瑞希、謝らないで私達、親友でしょ~それにじつとせば、あ
りがとうって言つてほしけな》

「……幽乃ちやん」

《うそ》

「あつがとうござまわ

《よひしべ》

私達はしばらく笑いあつてこました。

～ N o s t r i p e ～

「ちくしょり、あこひらめ……」

根本はFクラスに負けた後、女装をせられ、[写真撮影会]までやらされていた。

「覚えてろよ馬鹿共（Fクラス）！仕返しじゃやるからな……」

懲りもせずにまたなにか企んでいたようだ。

「だが、なぜ理科準備室なんだ？」

撮影会が終わるとBクラスの生徒が制服は理科準備室にあると言つていたのだ

ガラツ

「さて、何処にあるんだ？暗くてなにも見えんな……（パチッパチ
ツ）ちつ、電気通つてねえのかよ

中に入つて、根本は手探りで辺りを探した。

今は夕暮れ時、窓があるとはいえ室内は暗かった。

ピシャ

「な、なんで、いきなりドアがしまったんだ?」

シユボツ

「?誰かいるのか?」

部屋が明るくなつたので根本が灯りの方を向くと…

そこには…

「ひ!」

アルコールランプを持つた人体模型がいた。

「な、なんだ。脅かしやがつて…」

根本は一安心していたが…

『……ハツ』

「?」

『ハハハハハハハハハツ!』

7

いきなり人体模型がその体をゆすりながら笑い始めた。

「お、おい、なんの冗談だよ！誰かいるんだろ？早くでてきやがれ！」

だんだんと顔を青くしながら根本は懇願するよつに叫ぶが返事は返つてこず、笑い声だけが響いている。

ポンツ ポンツ

不意に根本の肩を誰かが叩いた。

根本は強気になり、勢いよく振り返ったが……

モード

「ひい！」

そこには同じくアルゴールランプを持つた骨格標本が立っていた。

卷之二十一

その骨格標本もその体の骨をカラカラと鳴らしながら笑い出した。

『ヒヒヒヒッヒヒヒヒヒハハハハツハハハハヒヒヒヒヒヒヒフ

「あ、ああ……」

「一体の笑い声が室内を包んでいき。根本は耐えきれなくなり気絶した。

二でしま二た

「旧校舎の理科準備室にある人体模型と骨格標本には魔物が住み着いている」と……のちにこれを聞いた生徒はこういった。

S N O S i d e o u t }

第十一話

「一騎打ち?」

Bクラス戦の翌々日です。
補給試験も終わって、Aクラスに宣戦布告に来ました。
今回の戦争は私も一緒にです

「ああ。FクラスはAクラスに一騎打ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなの?」

「もちろん、Fクラスの勝利よ」

今、雄一くんは秀吉くんの双子のお姉さんの木下優子さんと交渉しています。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「なる程、賢明な判断だな。といいで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった?」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ? 何の問題もなし」

秀吉くんが震えていますね…

大丈夫ですよ。私もいます。

「Bクラスとやつあつ氣つてある?」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

昨日の毒キノコの姿を思い出したんでしょうな。

私は見てないんですが、想像しただけで吐き気がします……

「ああ、アレが代表をやつてるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされないようだがな」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取りない限り試召戦争はできなのはずよね？」

「あの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題もない。Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

「人聞きの悪い。ただの忠告だ」

脅しと変わらないよ雄一くん

「うーん……わかった。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないから、その提案受けるわ」

「え？ 本当？」

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん

……」

確かにあれもトライアウマものだもんね。

「でも、これからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互に五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、つていうのなら受けてもいいわよ?」

「なるほど。」うちから姫路が出てくる可能性を警戒しているのか?」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だわ。その言葉を信用出来ない」

「やうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント?嬉しいな」

「その代わり勝負の内容は」うちで決めをせんでもらう。それくらいいいよな?」

「え?うーん」

木下さんは再び悩み始めた。
といいますか、雄二くんはあくびこね。

「……受けてもいい」

「うおつ！」
「きやつ！」

突然、二人の間に美少女が現れました。

「…………雄一の提案を受けてもいい」

その少女はAクラス代表にして私のもう一人の親友の霧島翔子でした。

『しょー』——『

「…………久しぶり幽乃」

「あれ？ 代表。 いいの？」

「…………その代わり、 条件がある」

「条件？」

「…………負けた方は何でも一つ【言つ】ことを聞く」

「…………！（カチャカチャ！）」

『ムツツリーーー！手伝うぞ！』

『レフ板はまだか！』

『照明、持つてきただぞ！』

『誰がございましたんでしょ、』

いきなつ姫さん（特にFクラスの人達）が騒ぎ始めました。

「じゃあ、いつよいつ。勝負内容は丑つの内二つをひとつに決めさせ
てあげる。二つまで決めさせて？」

「交渉成立だな」

『坂本！句を勝手に！』

『やつだぞ！まだ姫路さんが了承してない！』

注意したいなら作業をやめたらいいのに……

「心配するな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「こつ、ビリでやるっ！」

「勝負会場はここ、時間は十時からでいいだ

「分かったわ」

「よし、みんな教室に戻るぞ」

いよいよAクラス戦が始まります。

第十四話

Aクラス

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はAクラス担任で学年主任でもある高橋先生が務めるみたい
です。

「ああ」

「…………問題ない」

「それでは一回戦の人、どうぞ」

「あたしから行くわ」

向こうには木下さんが出るみたいですね。

「ワシがやつ」

秀吉くんが出るみたいです。

「とにかく、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

?なんか用事でもあるんでしょうか?

「Cクラスの小山さんって知ってる?」

あ……

「あ、姉上? これにはじやな?」

「ちょっとこっちに来てくれる?」

「ま、待つのじゃ姉上! 話を…」

「い・い・か・ら!」

「……わかったのじゃ…」

秀吉くんが廊下に連れて行かれます。
た、大変です!

《明久! ちょっと行つてくる!》

「え? 幽乃?」

私は急いで廊下に向かいました。

「姉上、話とは…………どうじてワシの腕を掴むのじゃ?」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがC
クラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているの?」

扉を開けると秀吉くんの腕を掴んでいる木下さんがいた。

「は、話を聞いてくれ姉上！」

「フフフッ、言い訳は結構よ……」

そうして、秀吉くんの関節を……って、ますいです！

《待つてー!》

「ゆ、幽乃？」

「あら、確か吉井くんが持つっていた人形ね。なにか用かしら?」

二人は私に気付いてこちらを向いています。

《お願い、秀吉くんを許してあげて》

「だめよ、この演劇バカのせいでの私のイメージが下がったのよ

《お願い……》

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「う

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「ううううう

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「……分かったわ。今回だけよ」

「あつがとう姉上、それとすまなかつたのじや」

「今度から気を付けなさいよ？」

私達は教室に戻りました。

「それでは一回戦を始めて下せこ」

高橋先生から試合を始めるよつて言われたが…

『ねえ、雄一くん』

「なんだ?」

『(J)は棄権しない?』

『(J)なにー?』『』

Fクラスから驚きの声があがりました。

「……理由はなんだ?」

『木下さんに迷惑を掛けちゃつたでしょ?だから、そのお詫び』

『それに、雄一くんも他に作戦を考えているんでしょ?』

「…………そうだな。木下姉には迷惑を掛けたからな。(J)は棄権
しちゃう」

「分かりました。Fクラスが棄権するので、この試合はAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言で一回戦が終わりました。

次は二回戦です。

第十五話（前書き）

明久の成績が明らかに！？

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

第十五話

「それでは一回戦の人は前へ」

「私がいきます」

Aクラスからメガネを掛けた女の子が出てきましたが、誰でしょう？

「よし、明久行ってこい」

「え？ 僕？」

おおーついに明久ですね！

『頑張つてきてね！』

「うん、瑞希ちゃん幽乃をお願い

「はい、明久くん勝つってきて下さいね」

「任せて！」

明久が中央に進んでいきます。

「教科はなににしますか？」

「化学でお願ひします」

女の子が宣言しました。
得意科目でしょつか？

「では、始めて下さい」

「「試験召喚！」」

『Fクラス 吉井明久

VS

Aクラス 佐藤美穂

化学
175点 VS 367点

『『なにー！』』

Aクラスの人達は驚いていますね。

「なんだあの点数、本当に明久か？」

……はじめましたよ…

『どうこういじだー..』

『あいつ、確か観察処分者だろ！』

『まさか、カソニングしたの！？』

「そこまで言わなくても……」

『明久！落ち込まないで』

「そうですよ。明久くんが頑張っていたのは私達が知っていますから」

私と瑞希はすぐに駆け寄つて、明久を慰めました。

「…………吉井、元気だして」

あれ？翔子？

こっちに来ても平氣なの？

『なー!? 代表に慰められているだとー!』

『代表は優しいわね』

『ついでましまして吉井を殺しそうだ……』

あ、これでもAクラスの人達には好印象なんだ。
あと最後の人、物騒だよ？

『異端者がいるがヤるか?』

『待て、今は霧島さんや姫路さんがいるんだ。迂闊にやれんぞ』

『卑怯だぞー吉井』

Fクラスの方も物騒だよー?』

「……」

あれ？ 雄一くんが不機嫌そうにひつち見てる。
嫉妬してるのかな？

「そりそろ試合を始めてください」

「あ、はい。あらがとう幽乃に瑞希ちゃんに霧島さん」

《頑張ってね！》

「うん、待たせてゴメンな、佐藤さん。それじゃあ始めよ！」

「手加減しませんからね！」

一回戦がようやく始まった。

数分後

『Fクラス 吉井明久

VS

Aクラス 佐藤美穂

化学

「まさか、ここまでやられるなんて思つてもいませんでしたね…」

「はは、僕もだよ」

「ですが、そろそろ決着をつけましょ！」

「そうだね…」

「二人とも自分の武器を構えたまま動きませんね…」

「「はあ…」」

ザシュー！

『Fクラス 吉井明久

VS

Aクラス 佐藤美穂

化学
0点 VS 0点

「両者、戦死のためこの試合、引き分けです」

こうして一回戦は終わりました。

第十六話（前書き）

一 気に一試合書きました！

それでは、どうぞ！

第十六話

「では次の方、どうぞ」

「…………（スクツ）」「

お、次は康太くんですね。

「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは、ボーアッシュ？な女の子が出できました。

「一年の終わりに転入してきた、工藤愛子です。よろしくね

「科目は何しますか？」

「…………保健体育」

保健体育。

この科目は康太くんの最強の武器だつたね。

「土屋君だつけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

向こうの工藤さん？が康太くんに話しかけてきました。

「でも、僕だつてかなり得意なんだよ？君とは違つて……

実技でね」

「…………（ブシャアアー……」

工藤さんの言葉に康太くんの鼻から滝のよつ』……つて。

「ムツツリー——！」

《康太くん！？》

私と明久はすぐさま康太くんの元に駆けつけました。

「吉井君だっけ？ボクによければ保健体育を教えてあげるよ？もち
ろん……実技で！」

「え？ それは……」

明久！ 惑わされちゃダメです！

「アキには永遠にそんな機会がないから、保健体育の勉強なんてい
らないのよ！」

なんですと！

それは明久に失礼ですよ！

「それに実技は私が教えます！」

ムニユ

「ムガツ！」

瑞希！

対抗心を燃やすのはいいけど、それは大胆だよ！
それに、そのままじゃあ明久が窒息しちゃうよ！

「なら、そつちの坂本くんは…」

「…………雄一には私が教える」

「翔子！お前はなにを言つてるんだ！」

「まさに阿鼻叫喚ですね……」

「…………そろそろ、始めてください」

高橋先生は冷静だな

だけど若干、頬が赤いですよ？

「はーい。試験召喚^{サモン}っと」

「…………試験召喚^{サモン}」

一人の召喚獣がそれぞれ武器を持つて現れました。

康太くんの方はBクラス戦で見せた一本の小太刀です。対する工藤さんは…

『な、なんだ！？あの巨大な斧は…』

召喚獣の一倍はある斧が出てきました。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの呪喚獣が斧を振り上げています。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーーくん」

そのまま無慈悲に斧を振り下ろす工藤さん。

《せやつーー》

見てられません！

「大丈夫よ幽乃。だつて…」

「……………加速」

「え？」

「……………あれば、ムツツリーーなんだから」

「……………加速、終了」

康太くんがそうつぶやいたので、田を開けると工藤さんの呪喚獣が全身から血を吹き出して倒れていきました。

『Fクラス 土屋康太

VS

Aクラス 工藤愛子

保健体育

573点 VS 446点

「そ、そんな……」のボクが……！」

相当ショックだったようで、工藤さんは床に膝をついています。

「……（スッ）」

「え？」

「……いい試合だった」

「あ、ありがとう／＼／＼

あれ？

工藤さんの顔が赤いけど……

あれあれ？

「勝者、Fクラス」

こうして、三回戦は終わった。

「次の方は？」

「は、はいっ。私です！」

こつから瑞希が出ます。

さあ、相手は誰ですか！

「それなら僕が相手をしよう！」

Aクラスからは、男の子が出てきましたが、
誰でしょ?・

「やつぱり来たな。学年次席、久保利光」

……ですか・

あの人気がそつなんですね……

……気を付けないとけませんね。

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

「それで始めてください」

「「試験召喚!――」」

『Fクラス 姫路瑞希

VS

Aクラス 久保利光

総合科目

4409点 VS 3997点

『なんだあの点数!?』

『いつの間にあんな実力を!?』

『この点数、代表に匹敵するぞー。』

Aクラスから驚きの声があがっていますね。

「ぐつ……姫路さん、どうやつてそんなに強くなつたんだね？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希、嬉しいことと言つてくれるわね。
でも……

『姫路さん、最高ー。』

『姫路さん、好きだー。』

『結婚してくれー!』

……この人達には不要だよね……

この後、瑞希が一刀のもとに久保くんを倒して四回戦も終わった。

次はいよいよ最終戦!

第十六話（後書き）

次はいよいよ最終戦！

第十七話（前書き）

遂に最終戦！

果たしてどうなるのか？

第十七話

「最後の一人、前へ！」

「…………はい」

Aクラスからはやはり翔子が出てきました。

「俺の出番だな」

雄一くんがでるんですね…

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史」

…………ん？

「内容は小学生レベルで」

…………あれ？

「方式は五点満点の上限あります」

「これって……

雄一くんの宣言で周りが騒ぎ始めました。

『上限あります？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

注意力？集中力？

違います……雄一くんがねりつてるのはそこじゃありません。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少し待つていてください」

高橋先生は教室を出て行きました。

「…………ねえ、雄一」

高橋先生の姿が見えなくなると明久が雄一くんに話しかけました。そばには当然、私と不機嫌そうな瑞希がいます。

「なんだ明久？」

「雄一には勝算があるんだよね？聞かせてくれない？」

「せうだな。話してやるか」

「それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ああ…………やつぱり……」

「その問題は……“大化の革新”だ！」

バキツ

突然の鈍い音に周りは音のした方を向いています。
そこには、倒れた雄一くんと拳を振り切った明久の姿がありました。

「ちょ、ちょっとアキ！ いきなり何してるのよ…」

む、今、明久の事を気軽に呼んだような気がしますね。
周囲もなにが起きてるか分かつてないようですが……
今はそれどころじゃありません！

「雄一！ お前は何をしようとしたのか分かっているのか！」

『雄一くん！ 翔子の大切な思い出をなんだと思ってるの…』

「最低です！ 坂本くん！」

翔子の…

翔子の大切な思い出を…

「……てめえらに、なにが分かる！ これは俺と翔子の問題だ！ 他人
が口をはさむな！」

『雄一くん！ それでいいの？』

「なんだと？」

『翔子とこんな形で決着をつけて、それで雄一くんは納得できるの
？』

「…………」

「雄一……」

「坂本くん……」

《雄一くん……》

ガラッ

「問題が出来ましたので、移動を……？何かありましたか？」

「問題が出来上がったようですね。」

雄一くんと翔子はそれを聞き、出口に向かいます。

「雄一……」

「明久……」これは俺へのけじめだ

雄一くんはやうやくと教室から出て行きました。

「アキ、どうしたのよ？」

「なぜ、あんなに怒つていたのじゃ？」

「…………意味が分からない」

いつものメンバーが近寄つて来ました。

「『メンみんな、これは話せないよ…』

そして私達はテストの様子を見る事ができる大型ディスプレイに向かいました。

「雄一　s.i.d.e」

あいつら勝手なことばかり言いやがって！
俺と翔子のなにが分かるってんだ！

「それではテストを始めてください」

さて、田舎の問題は…

く次の（ ）に正しい年号を記入しなさいへ

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

・　・　・

（ ）年 大化の改新

あつた！あつたぞ！

これで…

『雄一くん！それでいいの？』

！なんで今になつて！

『翔子とこんな形で決着をつけて、それで雄一くんは納得できるの
?』

正直、納得なんてできるか!
だが、これしか方法が…

……本当にこの方法しかなかつたのか?

……はつ、俺もバカだな…

……いろんな方法じゃなくとも他にいろいろとあつたつらによ…

なら、俺のやることは一つだな…

＼雄一 side out／

「それでは結果を発表します」

『Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄一 0点

「五回戦はAクラスの勝利です」

この勝負の結果にAクラスは呆気にとられ、Fクラスは怒りをあらわに視聴覚室に向かいました。

だけど、この結果に私と明久、瑞希は笑顔を浮かべていました。

第十七話（後書き）

次回は戦後対談です。

第十八話

「坂本、なにか言い残すことはあるか?」

「……」

「やうがならば、これより処刑を開始する」

『『『』』解一』』』』』

《ちよつと待つてー》

私達が視聴覚室に入るとみんながそれぞれ武器を構えていた。
どこからだしたんだ?」

「止めるな、ここには喉首を切り裂く体罰が必要だ!」

『いや、ここは紐なしバンジーだり!』

『……なら、全員でバックドロップコレーティングだ? 床はもちらんコンクリート』

『『『』』それだ!ー』』』』

《それだ、じゃないーもつそれ処刑だよー》

《それにみんなは翔子の点数より上を取れるの?》

「ちなみに、坂本君は名前の書き忘れはあったものの、問題はすべ

て正解していました

『『『『』つ…』』』』』

私が言つた後に高橋先生が追い討ちをかけてくれました。
ありがとうございます

「両者、一勝一敗一引き分けですが、延長戦を行いますか?」

「ええ、そうして貰だ…待つて優子」?なんですか代表?」

「…………私達、Aクラスは和平交渉を申し込みたい」

翔子の言葉にAクラスは驚きを隠せない。

『代表どうぞ!』ですか!?』

「…………このまま続けてもお互い消耗戦になるだけ。…………そこを
他のクラスに攻められたら勝てない」

『でも!たかがFクラスに…』

「…………その油断でここまで追い込まれたのは?」

翔子の言葉にAクラスの人達は黙り込んでしまいました。

「…………もちろん条件はある」

「条件だと?」

あ、よつやく話し始めましたね。

「…………まず、Fクラスは3ヶ月間はAクラスには攻め込んではいけない」

「分かつた。それだけか？」

「…………もう一つ、約束」

「約束だと？あれは勝った方が…………し、翔子、まさか……」

「…………私は勝った方がと言つたけど、クラスでの事とは言つてない」

確かにそうですね。

翔子……あなたは策士だね

「分かつた…………言つてみろ」

「…………じゃあ……」

「雄一、私と付き合つて」

やつと……

やつと言えましたね。翔子

事情を知らないAクラスとFクラスの人達は田が点になっていますね。

「お前、まだ諦めてなかつたのか?」

「…………私は諦めない。ずっと、雄一の事が好き」

「その話は何度も断つただろ? 他の男とやが合ひはれないのか?」

「…………私には、雄一しかいない。他の人なんて興味ない」

『おめでとう翔子』

「幸せにね、霧島さん」

「良かったですね。翔子ちゃん」

「…………幽乃に瑞希に吉井、みんないい人」

「拒否権は?」

「…………ない。約束だから、今からドアドア行く

やうこつて雄一くんの首根っこを……」

『違うよ翔子! 前にも言ったでしょ!』

「…………やうだった」

翔子は雄一くんの手を握つて立たせ、腕に抱きついた。

「…………行こう雄一」

「待て翔子、この後のことがあるからやめてくれ」

「…………なら明日ならいい?」

「や、やってやらんでもないがな——」

雄一くん? 口調が変なうえに顔が真っ赤ですよ?

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

あれ? この声は…

『西村先生? どうしたんですか?』

「ん? 吉井妹か、今から我がFクラスに補習について説明しようと
思つてな」

え? 我がFクラス?

「喜べ! 福原先生から補習授業担当のこの俺が担任になることにな
つた! これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ!」

『…………なにつー! ?』

「いいか。確かにお前たちはよくやつた。Fクラスがここまで来る
とは、正直思わなかつた。でもな、幾ら『学力が全てではない』と
言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全て
じゃないからと言つて、蔑ろにしていい物じゃない」

正に正論ですね!

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”だからな」

「「そりは（いかない！）いきませんよー何としても監視の目を搔い潜つて、今まで通り楽しい学園生活を過ごして（やるー）見せますー！」

「……お前らには、悔い改めるといつ発想はないのか？」

「「ない（ありません）ーー！」

「言こと切るなーー！」

こつしてAクラス戦は終わりました。

第十八話（後書き）

まだまだ続く試合戦争？

第十九話（前書き）

いよいよ試召戦争終了です

第十九話

「今からBクラスに戦争を仕掛けろ……」

私達が教室に戻ると雄一くんがそのまま宣言しました。

「（雄一、それ本当？）」

「（…………勝算は？）」

突然のことみんな戸惑っていますね。
明久と康太くんが雄一くんの目を見つめていますが……
アイコントラクトをしてるんでしょうか？

「（まあ、見てる……）そこでだーみんなに言つておきたいことがあるー。」

『なんだ異端者？』

「俺が異端者なのは置いておいた。Bクラス代表のことだが」

『根本がどうしたんだ？』

「あいつは……異端者だ」

『…………詳しく述べるー。』『…………』

一瞬にして皆さんが黒装束の集団にかわつましたよー？

「まあ、あいつはクラス代表の小山友香と付き合ってること」

『『『『殺せ……』』』』』

「まだだ、それだけじゃない」

？他にもあるんですか？

「あいつ…………姫路を脅して一股関係をつくれりとした……」

『『『『なに～～～～～』』』』』

ええ～～～！

そんな事までしようとしたのか毒キノ口！

「お前が、こんな暴挙を許せるか？」

『『『『許せるか！～～～～～』』』』』

「ならばーあの外道とそれに組する者をふさわしい場所に送り届けよつじやないか！」

『『『『『漠然だ！～～～～～』』』』』

「宣戦布告はさつき俺がいってきた。今日の一時から行ひ、野郎共

！準備はいいか！」

いつの間に行ひてきたんですか！？

それに一時つて、あと一分もないじゃないですか！？

「今日は電撃戦だ！FFF団は開始と同時にBクラスに突撃しあの外道を倒してこい！」

『『『『『言われなくともそうしてやる…………』』』』

み、皆さん…

これは召喚獣を使った戦争ですよ？
そんな鎌や斧なんて使いませんよ？

「よし、時間だ！野郎共ーしつかり逝つてこー！」

『『『『『おおおおお～～～…………』』』』』

皆さん行つてしましました…

「雄ーー！」

「どうした？」

「そつきの話は本当なのー！」

明久が怒っていますね。

「あれか？あれは嘘だ」

「え？嘘？」

「あいつはやる気を出させるために言つたんだが、予想以上だな

…」

そうですね…

本当に処刑とかしないか心配です。

結果を言いますと、Fクラスが勝ちました。

攻めていったFFF団があまりにも怖く、まともに戦えなかつたみたいですね。

さらには、瑞希との嘘情報がBクラスのやる気を失わせたのも要因の一つですね。

ちなみに毒キノコは敗戦と瑞希との嘘情報で完全にみんなから信用をなくして、代表を辞めさせられました。

そんなこんなで第一次試合戦争は終わりをつげました。

第十九話（後書き）

次回は少し恐いかも？

闇話～ある日の理科準備室～（前書き）

今回で今年は最後です。

来年、がんばります！

今回はほのぼのです。

闇話～ある日の理科準備室～

それは試合戦争が終わった数日後の放課後のことです。

『明久、おじいちゃんとおばあちゃんのところに行こう?』

「え? 人吉さんとお骨さんのところにへんなにがあったの?」

『違うよ。この前、毒キノコの驚かしてくれたお礼がしたいの』

「わかったよ。行こうか」

『うん』

明久と私は理科準備室に向かいました。

「あ、霧島さんに瑞希ちゃん。今から帰るとこだ~」

行く途中に瑞希と翔子に会いました。

「はい、これから翔子ちゃんと買い物していくと話してまして

「…………吉井は何処行くの?」

『これからおじいちゃん達に会いに行くの、翔子達も遊び〜』

「…………すみません。

「私、まだ慣れていないくて……」

「…………瑞希が行けるようになつたら私も行く」

「ありがとうございます。翔子ちゃん」

「それじゃあ、また今度ね？」

『バイバイ、瑞希に翔子』

「さよなら、明久くん」

「…………また明日」

「一人と別れて再び理科準備室に向かいました。

『おじいちゃん、おばあちゃん、遊びに来たよ～～』

私は理科準備室の扉を開けると開口一番にそいつ言い、飛びました。

『おお、幽乃か久しふりじゃの～』

『なにを言つてるんです?』の前、来たばかりじゃないですか?』

『やつじゅつたかの?』

『やつですか』

普通に会話が成り立っていますが、他の人から見たら恐怖しかないでしょ?ね。

なにせ、喋っているのが人形（今日はウサギのぬいぐるみ）と人体模型と骨格標本なんだから……

「久しぶりですね。人吉さんにお骨さん」

『おお、明久もおるのか』

『今、お茶を出しあげるらかねえ』

「お構いなく」

そう言って、おばあちゃんが何処からか湯呑みと急須を出しました。なぜあるか前に聞いたところ職員室から持ってきたとか、ちなみに茶葉は定期的に持つてついているらしい。バレないんでしょうね?

え?お湯?

そんなのビーカーで沸かしてましょ?

『はい、どうぞ』

「ありがとうございます。お骨さん」

わざわざから言つている人吉さんとお骨さんは一人?の名前です。

人体模型が人吉さん、骨格標本がお骨さんです（命名：明久）

私がおじいちゃん、おばあちゃんと呼んでいるのは「一人？」の口調からです。

私、おじいちゃん、おばあちゃんなんて知らないから嬉しいです

「一人？」とは去年、明久と観察処分者の仕事で一緒にここに来たときに知り合いました。

最初は驚きましたがすぐに仲良くなりました

私も長いことますが、知りませんでした…

「一人と知り合って、もうすぐ一年が過ぎますね」

『ワシは昨日のようになれるぞ』

『そうですねえ。今では孫のよつな子がいて私は嬉しいですよ』

『えへへへ』

おばあちゃんに頭を撫でられました。

人形同士、しかも幽霊の私にはあまり温度を感じませんが、撫でられたところがとても暖かかったです

その後、「一人？」とたわいもない話をして帰りました。

闇話～ある日の理科準備室～（後書き）

来年にまた、会いましょう！

第一十話（前書き）

あけましておめでとうございます！

いよいよ、清涼祭編

第一十話

「吉井ー！」つー。

「勝負だ、須川君ー。」

今、学園では各クラスが清涼祭に向けての準備をしていますが……
明久達は野球をしていました……

「準備をしなくて大丈夫なんでしょうか?」

『だめだよ……』

教室には私と瑞希、秀吉くんに島田さんしかいません。

「お前達、清涼祭について話が……」

教室の扉を開けて入ってきたのは西村先生でした。

「木下。他のはどうした?」

「皆はグランドで野球をしておるぞ!」

「まったくあいつ等は……連れ戻してくる」

西村先生は教室から出て行きました。

数分後、西村先生はみんなを連れてきましたが、全員を一気に担いで運んできた西村先生を見て、あなたは本当に人間か問いたくなりました。

「さて、清涼祭について話がある」

「そういえばさつきも言つていましたね？」

「クラス別の出し物だが、FクラスはAクラスと合同でやることになった！」

『『『』なに……』』

びっくりですね！

「どうこう」とだー

「BクラスとEクラスも喫茶店をやるんだが、流石に旧校舎では衛生上の問題があるために清涼祭の間だけ、この教室を使うことになつた」

『横暴だ！』

『訴えるぞー！』

「黙れー！只でさえ問題児だらけなんだ。Aクラスにはお前達を監視してもううー！」

みんな、まだ不満みたいですね～

『みんな、これはチャンスだよ』

「チャンス?」

『アーニー、アーニーだ？』

『うまくいけばAクラスの女子とお友達になれるよ』

『ダニエル』

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଏବଂ ମହାନ୍ ବିଦ୍ୟାଲୟର ପରିଚୟ

みんな、やる気になりましたね…

金文考略

西村先生、心中お察しします……

第一十一話（前書き）

いつの間にかPVが30000を越えていて驚いています..

第一十一話

私達はAクラスの教室に来ました。

「…………雄一、一緒にきて嬉しい」

「待て翔子、抱きつくな。Fクラスの奴らが上履きを投げようとしている上にAクラスの奴らも上履きをぬぎ始めている」

翔子は人気がありますね~

「みんな、ふざけてないで準備にかかるわよ」

『木下さん、Aクラスはなにをやるの?』

「メイド喫茶をやるわよ」

『メイド喫茶?』

なにか物足りない感じが……

「それなら執事もやらない?男の子も多いし」

「そうです。そうです!」

「それですよ明久!」

「そうね、執事もいれば宣伝こいわね。それじゃあ、どう分けよつかしら?」

「Aクラスはどう分けたんだ？」

「接客を女子が中心に、男子が厨房を中心こころくる予定よ」

「なら、Jリーチからは姫路と島田、あと男子を数名が接客で他は厨房か雑用でいいか？」

「そうね、こちらからも男子を数名、接客にまわすわ」

「雄一くんと木下さんが話を進めてこきますね。」

「じゃあ、僕は厨房だね」

「吉井くんって料理が出来るの？」

「人並みには出来るよ」

「はい、明久くんのはおいしいです。心が折れるぐらいに……」

「…………いつか乗り越えたい」

「や、そんなになの？」

瑞希と翔子の言葉に木下さんは驚いています。

「試しに食べてみる？おやつに焼いてきたんだけど」

やつぱり、明久は懐からラップに包まれたクッキーをだしました。

「いたぐわ」

木下さんはクリッキーを一個とり、食べました。

「…………」

「どうしたの？」

木下さんが食べたまま動きませんが、どうしたんでしょ？

「……負けた」

そのまま木下さんは○△状態になりました。

『木下さんがすい』に落ち込んでいるよ』

『そんなに美味しいのね……』

なんかAクラスの女子達が恐怖していた。

「とにかく、準備をしようぜ。大体の設置はやつてあるよ!だから、細かいところからやつていいくか」

こうして、清涼祭に向けての準備は始まりました。

第一十一話（前書き）

更新遅れてすみません。

ではどうぞ。

第一十一話

《明久、明久》

今は放課後です。

「どうしたの幽乃？」

《久しぶりにカラルさんのところに行かない？》

「なんでババアのところに？」

《じゅーちゃんと学園長つて言いなさい！》

「『れくら』が丁度いいんだよ」

と、しゃべりながらも私と明久は学園長室に向かいました。

「何処行くんだ、明久？」

「あれ雄一？ そんなどころに入つて何してるの？」

確かに、

ポリバケツなんかに入つて何してるのかな?

「俺は翔子から隠れてるところだ」

『素直になればいいのに…』

「つるせえー！それでお前らは何処にこくんだ？」

『カラルさんに会いに行くんだよ』

「カラルさん？」

あれ？

カラルさんと書いて分かりませんか？

「ババアのところだよ」

「なるほど、学園長のところか」

『なんでそれで分かるのー…』

ほんと、驚きですよー！

「よし、俺も行こう！」

「雄一もくるの？」

「ああ、翔子から隠れるにはちょうどいい場所だ」

ふうへん

《（ボソッ）…あとで連絡しよう》

「ん？ なにか言つたか？」

《別に、まいり行ひ》

私達は再度、学園長室に向かいました。

『……賞品の……として隠し……』

『……………勝手に…………如月グランデパークに…………』

「ん？」

「どうした、 明久？」

「なんか、 中から話し声が……」

「本當ですね。」

けど、これって言い争いをしてるような……

「とつあえず、 学園長が居るとわかつたんだから、 入っただまおいつぱい

？」

「そうだね」

え？

「「失礼しまーす」」

《本当に失礼だね！》

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

声のした方には長い白髪が特徴の藤堂カラルさんがいました。

試験召喚システム開発の中心人物であり、この学園の長です。

「やれやれ、取り込み中だと言つのに、とんだ来客ですね。これは話を《カラルさん》続ける……最後まで話を聞けないんですねか？」

なにかしゃべつてましたが、気にせずに、カラルさんに飛びつきました。

もう一人は、鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気らしい竹原教頭ですが、

私は嫌いですね。

なぜつて？

ことある事にカラルさんをいじめるからですよ。

「まさか、貴方の差し金ですか？」

ほらね。

「バカを言わないでおくれ。負い目もないのにビハビハのアタシ
がそんなせこい手を使わなきゃいけないのか？」

《そうだぞ、駄眼鏡野郎》

「それはどうだか。学園長は隠しどがお得意の様ですから
『さつきから言つていろよ』、隠し事なんてないね。あんたの見
当違いだよ」

《そうだぞ、駄教頭野郎》

「……………わつですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう
事にしておきましょ」

そう言つて駄教頭は眉間に青筋を浮かべながら帰つて行きました。
ざまあみろ！」

「幽乃、言ふ過ぎだよ」

《私、あの人嫌いだからいいんだもん》

「いいんだもんって……」

「それで、幽乃と吉井は知つてるが、あんたは誰だい？」

そういうて坂本くんを見るカヲルさん。
ちなみに私とカヲルさんは親友なので名前で呼び合つてます。

「これは一学年のバカの代表です」

「そりゃかい、あんたが坂本かい」

「待てババア、それで納得するな」

「さて」

あ、スルーしましたね。

「ガキ共、なにか用かい？わたしは暇じやないんだよ

「幽乃がババアに会いたいって言つから来ただけですよ。」

「俺は暇つぶしにだ。でなけりやあ好き好んで妖怪の住処に来るか

「わうだよね〜」

《言ひ過ぎだよー》

「まつたく……」

.....
.....

《ねえ、カヲルさん》

「どうしたんだい？」

『なにか悩み事でもあるの?』

そういうとカラルさんは顔をしかめました。

「そりなんですか、ババア」

「わうなんか、妖怪」

「いい加減にその呼び方はやめないかい!まあ、悩み事はあるわね……」

「どんなことなんだ?」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい?」

『そんなのありましたね』

「じゃあ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい?」

「確か、優勝賞品は『トロフィー』と『白金の腕輪』、副賞は、『如月グランドパークプレオーブンペアチケット』を二組。

準優勝者には、『盾』と『緋金の腕輪』、副賞に『如月グランドパークプレオーブンチケット』を一組だったな

「その腕輪に問題があつてね。あんたらに回収してもらいたいんだよ」

「回収？ それなら、賞品に手をなければ良いじゃないですか」

「やつでやるならしたいたさね。腕輪は新技術として発表する予定だし、今更中止すると新技術の存在すら疑われるんでね」

「そんな腕輪を賞品にしないでくださいよ」

もつともな話ですね。

「うるさいね。大会の田までに直しつとしたりしたんだが直しつにならないんでね…

それに加えて、チケットの良からぬ噂もあるしね…」

「なんだ？ 良からぬ噂ってのは？」

「如月グループは、如月グランドパークに一つのジンクスを作りつとしているのか。『ここを訪れたカップルは幸せになれ』ってジンクスをね」

《ジンクス？ どうして？》

「プレミアムチケットを使って来た三組のカップルを、結婚までローディネートするつもりらしいのさ。企業として多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だとー？」

それを聞いて雄一くんが血相を変えたように大声を上げました。

『どうしたの雄二くん、そんなに慌てて?』

「慌てるに決まってるだろ?が! 今ババアが言つた事はブレオーブンプレミアムチケットでやつてきた三組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させるつことだぞ! ?」

「別に言い直さなくてもそれくらいわかるよ?」

「その三組のカップルを出す候補が、文月学園ってわけさね」

「うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もあるしな。それに、学生から結婚まで行けばジンクスとして申し分ない。候補としてこれ以上の学校はないな」

「ふむ。そっちのガキは流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転がまずまずじゃないかい」

よく知つてゐな~カヲルさん

「とりあえず落ち着きなよ、雄二。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知つてゐるんだから、行かなきゃ済む話じゃないか」

そうですね。

一体なにをそんなに焦つてるんでしょう?

「……絶対にアイツは参加する

……行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚

……俺の、将来は……。」

……

「どうやら翔子と無理な約束をしたんですね……

「な、なら、」じらからも提案がある

「何だ?」言つてみな

「召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、1回戦が数学なら2回戦は化学といった具合に進めていくと聞いているが」

「それがどうかしたかい?」

「対戦表が決まつたら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい

「良いだろ。点数の水増しどうだつたら一蹴していただけ、それなら協力しようじゃないか。

それで、そこまで協力するんだ。当然、召喚大会で優勝できるんだろうね?」

「無論だ。俺たちを誰だと思つてこる?」

雄一くんと明久の表情がやる気満々です。

「そりゃ。それじゃあアンタたち。任せたよ」

「「了解！」

じつして、明久と雄一くんの大会参加が決まりました。

第一二三話（前書き）

いよいよ学園祭開始！

第一二三話

いよいよ学園祭当日です。

今日はこの前、明久がクレーンゲームで取ってくれた三毛猫のぬいぐるみです。

とってもかわいいんだ

それに今回は康太くんがお洋服を作ってくれました。

赤と白のメイド服です

『お帰りなさいませ!』

始まつて数分もしないうちに、たくさんのお客さんが来ていています。

「始まつたばかりなのに凄い盛況だね…」

《そうだね…》

「おい、明久!話してないで手を動かせ!」

「う、うん…」

明久もさつきから料理を作りっぱなしです。

《雄一くん》

「なんだ?」

私が話しかけても雄一くんは手を動かしたまま…

流石ですね！

『私はなにをやればいいの？』

「なにもしないでじつとしてる」

『暇なんだもん…』

「…………だつたらコノ」

『コレなに？康太くん』

康太くんが袋を渡してきました。
箱みたいなのがありますね。

「…………お持ち帰り用のだ」

『でも、落としちゃつたら…』

「…………中はクッキーだ。それに、小さいから大丈夫」

あ、本当。私が持つても大丈夫だ。

『うん、分かった』

わたしはクッキーを持って向かいました。

（雄一 side ）

「なあ、ムツツリーーー」

「…………なんだ」

幽乃が行つてから俺はムツツリーーーに話しかけた。

「お前つて妙に幽乃に優しいよな？」

今回だつてあいつのために衣装を作つてたしな。

「…………貴重なやつだからだ」

「貴重？…どう？…」とだ？

「康太だろ？」

「…………この前、明久に俺の名前を聞いてみた」

「…………ムツツリーーーと應えられた……」

「…………」

「…………他のやつも同じ应えだった……」

「苦労してゐるんだな…………」

今度、上物の参考書（保健体育専用）をやるよ…………

} 雄
—
side
out }

第一十五話（前書き）

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

第一一十五話

「おーい、須川」

「どうしたんだ？」

「少しの間、厨房は任せる。俺と明久、秀吾とムッシローは召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「ああ、分かった」

もう、そんな時間ですか、ちなみに厨房側は康太くんと須川くんが代表です。

「あれ？ アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？ そうだけど、美波も出るの？」

「うん、ウチは瑞希と出るわよ」

そういうえばこの前、瑞希がそんなこと言つてましたね。

「それって、賞品が目的……？」

む、なにか不穏な空気が……

「うーん。一応そういう事になるのかな？」

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

警戒態勢、警戒態勢。

島田さんの田がスッと細くなりました。
それに全身から黒いオーラが噴き出しています。

「明久君。私も知りたいです」

瑞希も明久を見つめています。

「明久は俺と行くつもりだ」

ゆ、雄一くん！？

『雄一くん！まさか男に！』

「なに勘違いしてやがる！」

「やうだよ、雄一は霧島さんのデートの為に頑張ってるんだよ」

《そうだったね》

「なに！？」

「じゃあチケットは、坂本にあげるつもり？」

「うん、やうだよ」

「…………雄一、そこまで考えてるなんて嬉しい」

「翔子、お前はなにか勘違にしてるー。」

「やうやく時間だよ。早く行かなーと」

「おいつ、誤解を解かせろーーー！」

誤解じやないのにー

「あれ？ ムツツリーーくんもてるの？。」

そういうて土藤さんが来ました。

「…………お前には関係ない」

「冷たいなー。もしかして準優勝の賞品が用意して？」

「…………そんなの欲しくない（ブンブン）」

図星なんですね…

ちなみに『白金の腕輪』は、召喚獣を2体同時に呼び出せるタイプと、立会人になれる（教科指定可能）タイプの2つで。

『緋金の腕輪』は、召喚獣を透明にするタイプのみです。

これで康太くんが参加した理由が分かりましたね。

「ち、ちなみにチケットはどうあるのーーー」

「？…………秀吉に渡すつもつ」

「そ、そつなんだ……」

……どんまい工藤さん！

「そろそろ行くかの」

「…………（「クリ）」

康太くん達も大会に向かいました。

第一十五話（後書き）

康太も明久並みに鈍感？

第一十六話（前書き）

久しぶりにPVを見たら、40000を越えていた。
これからも頑張るしかない！

第一一十六話

しづめいへかねと、ホールの方から騒ぎ声が聞こえ始めました。

『なにがあつたんだら?』

「行ってみましよう」

丁度、休憩していた木下さんとホールに向かいました。

『JRのまやこ料理はなんだよー。』

『不味くてしかたねえなー。』

ホールに着くと妙なことを言つてゐる坊主頭とソフトモヒカンがいました。

「お姫様、どうかなれこましたか?」

わすが木下さん、一寧に対応してますね。

「どうかしたじやねえよーなんだこの不味い料理はー。」

「JRさんの密に出すなよー。」

わす、木下さんせんせうひつぱうだらう。

「それは、お客様の舌がおかしいのです?」

あれ?

「俺達の舌がおかしいだと?」

「はい、先ほどから『来店される方は美味しいと申される方ばかりです。そんななか、不味いと申される方がいるのではその方の舌を疑う他ありません』

……す』」こな木下さん…

『確かにこれ美味しいよな』

『これ就不味いつてね~』

『本当、舌がおかしいよな』

周りの人達も賛同してくれますね。

「下級生のクセに生意気なんだよー!」

「俺達は年上だぞ!」

「年上なら年上らしい態度をしてください」

確かに……

「IJの野郎!」

すると坊主頭が腕を振り上げました。

『やめなさい』

私は木下さんの肩から飛んで地面に降りると「匹？」に向かつて叫びました。

「わ！なんだこの人形！」

「気持ち悪い！」

む、気持ち悪いとはひどいですね。

『あなた達、年下に暴力を振るつんじゃあいませんー。』

「うみせえなー。」

「しゃべんじやねえよー。気味悪いー。」

『大体、悪いのはやつちでしょ。謝りなやー。』

「へん！誰が、おこーまつたくーの責任者は誰かいないの、ゴペりッー。」

すると坊主頭が吹っ飛んでいきました。

「私が責任者の一人の坂本雄一です。何かご不満な点はございましたか？」

雄一くんが執事服姿で坊主達に話しかけています。

「いや、不満も何も今、連れが殴りとばグペラッ！」

すると、ソフトモヒカンも吹っ飛んでいました。

「それは僕達のモットーである『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀧ですか？」

今度は執事服姿の明久が話しかけています。

一人ともかつこいいですね。

「ふ、ふざけんな！何が交渉術ぎやああ！」

「そしてこれが『キックでつなぐ交渉術』です」

「さて、最後に『プロレス技で締める交渉術』が待っておりますが？」

「わ、わかったー！」ちらからりほの夏川を出でるー。」

「待て常村ーお前、俺を売るのはしてるなー？」

仲間を売るのはするソフトモヒカンの常村と慌てる坊主頭の夏川です。

「まだ交渉を続けますか？」

「い、いや、もう充分だ。帰らせてもうひ

「やつですか。なら……」

明久はそのまま坊主頭の腰を掴みました。

「おこー向しやがるー。」

「は、離しやがれ！」

隣をみると雄一くんがソフトモヒカンの腰を掴んでいます。

「それじゃあ……」

「これで……」

「「交渉終了だ」」

明久と雄一くんはバックドロップの状態で技をかけました。
そして坊主頭とソフトモヒカンの頭がいい音を出しながらぶつかりました。

「「お、覚えてるよーーー。」」

「四?は立ち上がり、どいかの小物のような捨て台詞を言つと走つて逃げていきました。

「明久、あいつらの特徴覚えてるか?」

「うん。常夏パンパンで覚えたよ」

明久……なかなかいいネーミングセンスですー。

「ありがとう、吉井くんに坂本くん」

「大丈夫だった、秀吉のお姉さん?」

「優子でいいわよ、呼びにくいでしょ?」

「え?なら優子さんでいいかな?」

「いいわ

なんか仲良くなつてますね……

『ねえ、木下さん』

「なに?」

『私も優子って呼んでいい?』

「いいに決まつてるじゃない

『なんで?』

「もう私達、友達でしよう?」

え?

『……いこの?』

「なにがかしら？」

『私、人形なのにしゃべるんだよ?』

「……」

『それ』

スリスリ

『?』

木下さんが頭を優しく撫でてくれてます。

「さつきのあの人達の言葉は気にしなくていいのよ?」

『でも……』

「それに殴られそうな私を助けてくれたじゃない」

『……』

「私と友達じゃ、嫌?」

『そんな!』

「そんな」と一・

「なら、いいじゃない」

.....

『よ、よひしくね。ゆ、優子ー』

「うそ、よひしくね。幽乃」

こうして、私に新しい親友ができました

第一十六話（後書き）

優子が仲間に加わりました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171z/>

バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

2012年1月10日23時49分発行